

おくのほそ道『旅立ち（序文・漂泊の思ひ）』定期テスト対策問題（問題編）

組 番 氏 名

／100点

本文

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり〔①〕。舟の上に生涯を浮かべ、馬の口とらへて老いを迎ふる者〔②〕は、日々旅にして旅を栖とす〔③〕。古人も多く旅に死せるあり〔④〕。予もいづれの年よりか〔⑤〕、片雲の風にさそはれて〔⑥〕、漂泊の思ひやまず〔⑦〕、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巣を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に、白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心をくるはせ〔⑧〕、道祖神のまねぎにあひて〔⑨〕取るもの手につかず、ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆる〔⑩〕より、松島の月まづ心にかかりて〔⑪〕、住めるかたは人に譲り、杉風が別荘に移るに、
草の戸も住み替はる代ぞ雛の家〔⑫〕
面八句を庵の柱に懸け置く〔⑬〕。

※本文は教科書標準の表記に整えています。「片雲の風にさそはれて」と「海浜にさすらへ」の間など、本によって細部の異同（仮名遣い・送り仮名）があります。

設問

1. 現代語訳

- 傍線部〔①〕「月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり」を現代語訳しなさい。
- 傍線部〔③〕「日々旅にして旅を栖とす」を現代語訳しなさい。
- 傍線部〔⑦〕「漂泊の思ひやまず」とはどのような気持ちか、現代語訳しなさい。

2. 文法・敬語

- 傍線部〔②〕「馬の口とらへて老いを迎ふる者」とは、具体的にどのような人を指すか、簡潔に説明しなさい。
- 傍線部〔⑤〕「いづれの年よりか」の「か」は何を表す係助詞か。文法的な働き（係り結び）を含めて説明しなさい。
- 傍線部〔⑪〕「松島の月まづ心にかかりて」の「て」の文法的説明として正しいものを選びなさい。
ア 完了の助動詞「つ」の連用形 イ 接続助詞「て」 ウ 格助詞「て」 エ 間投助詞「て」

3. 語句

- 傍線部〔①〕「過客」の意味を答えなさい。

8. 傍線部〔⑥〕「片雲の風にさそはれて」の「片雲」の意味を答えなさい。
9. 傍線部〔⑧〕「そぞろ神」、傍線部〔⑨〕「道祖神」とはそれぞれどのようなものか、簡潔に説明しなさい。
10. 傍線部〔⑩〕「三里に灸すゆる」は何のために行うことか、答えなさい。

4. 内容理解

11. 傍線部〔④〕「古人も多く旅に死せるあり」について、「古人」とはどのような人々を指すか。本文の冒頭部とのつながりをふまえて説明しなさい。
12. 傍線部〔①〕は対句的な表現になっている。どの語句とどの語句が対応しているか、二組を抜き出して示しなさい。
13. 傍線部〔⑫〕「草の戸も住み替はる代ぞ雛の家」の句について、(a) 季語と季節、(b) 句に詠まれた情景・心情を説明しなさい。

5. 文学史

14. 『おくのほそ道』について、(a) 作者名、(b) 成立した時代、(c) このような旅の記録を文章にまとめた文学の種類（ジャンル名）を、それぞれ答えなさい。